

徒然草 兼好法師 花は盛りに

①花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは。②雨に向かひて月を恋ひ、たれこめて春の行方知らぬも、なほあはれに情け探し。③咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。④歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、早く散り過ぎにければ。」とも、⑤「さはることありて、まからで。」なども書けるは、⑥「花を見て。」と言へるに劣れることかは。⑦花の散り、月の傾くを慕ふならひはさることなれど、⑧ことにかたくななる人ぞ、「この枝、かの枝、散りにけり。今は見どころなし。」などは言ふめる。

⑨よろづのことも、初め終はりこそをかしけれ。⑩男・女の情けも、ひとへにあひ見るをば言ふものかは。⑪あはでやみにし憂さを思ひ、あだなる契りをかこち、長き夜をひとり明かし、⑫遠き雲居を思ひやり、浅茅が宿に昔をしのぶこそ、色好むとは言はめ。

⑬望月のくまなきを千里のほかまで眺めたるよりも、⑭暁近くなりて待ち出でたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、⑮木の間の影、うちしぐれたるむら雲隠れのほど、またなくあはれなり。⑯椎柴・白檜などの、ぬれたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、⑰身にしみて、心あらん友もがなと、都恋しうおぼゆれ。

⑱すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは。⑲春は家を立ち去らでも、月の夜は閨の内ながらも思へるこそ、いとたのもしう、をかしけれ。⑳よき人は、ひとへに好けるさまにも見えず、興ずるさまもなほざりなり。・片田舎の人こそ、色濃くよろづはもて興ずれ。・花のもとには、ねぢ寄り立ち寄り、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、果ては、大きな枝、心なく折り取りぬ。・泉には手・足さしひたして、雪には下り立ちて跡つけなど、よろづのもの、よそながら見ることなし。